

知多第二火力発電所のハヤブサに係わる事業者の予測 について

委員 柳澤 紀夫

・準備書 1225 頁 影響予測

ハヤブサが繁殖の可能性のある集合煙突は、対象事業実施区域外であること、煙突は現状のまま維持されることから、対象事業での工事の実施及び施設の存在による繁殖地への影響はないものと予測する。との見解ですが、施設の存在はともかく、工事の実施中に影響が出るものと考えられます。

・1204 頁～1208 頁の図を見る限り、事業実施区域がここに棲息しているハヤブサの生活にとって大切な場所であり、工事中にあっても煙突は現状のままに維持されるとして、無関係を装える位置にあるとは思えません。

集合煙突の位置と対象事業の実施区域との最短の距離（事業者を確認する必要はありますが）が200m程度と考えられます。このような巣から近距離での工事を行うことにつきましては、体の大きさの近いオオタカの場合で考えますと、巣からの距離300mの範囲は、営巣中心域に当たるとして、事業者には種々の配慮が必要と認識されています。

・まず、工事工程についての配慮が必要で、ハヤブサの非繁殖期に工事を実施するよう望むこととなります。一般には8月から12月がこれに当たり、1月から7月の繁殖期については、工事を止めてほしい旨の要望も行えると思われれます。工期などの問題でその対応が無理な場合には、より細かいところまでの配慮が必要になると思われれます。

1203 頁の表は、当地での繁殖が最後まで進まなかった個体によって書かれたものであり、繁殖が滞りなく行われたハヤブサのものではないことを示しておく必要もあります。（文章の修正が必要）

・次に、営巣の様子をビデオカメラなどで観察しながら、工事を進めてもらうと良いでしょう。ことに、工種が変わる場面では、（例えば大型のクレーンが稼働するとか、大きな突発音が出る工事とか）特に注意してもらう必要があります。

・工事の影響により、鳥がどのように行動するか、などについては、工事が行われていない時期の観察があると、工事による影響を察知しやすくなります。このためには1～2年前からカメラによる観察・映像の確保を行なって、生活の解析をしておくといわれれます。

・繁殖の様子を観察していて、繁殖行動が途中で終了してしまった場合には、原因のチェックなどにも利用できますし、早くに工事にとりかかれることもあると思われれます。

・人が工事範囲から出ないことを鳥に認識させることも大切で、人が近づかない約束をするためにフェンスが必要です。人の活動・重機の稼働などの姿を見せないために、防音や防塵のためのカバーを張ることも役立つと思われます。

・ただ、過去2年間では当所に棲息しているハヤブサの繁殖は上手くいってはいませんが、繁殖がうまくできるように配慮することも必要な措置と思われます。

この煙突での、繁殖がうまくいっていないのは、煙突の材質である金属が熱を持つために産卵された卵に不自然な熱が加えられてしまうことと想像されますので、ハヤブサのために繁殖用の巣箱（箱ではないが）を落下することのないような工夫を行なって、架設することが望まれます。設置については非繁殖期に行えばよいでしょう。

ハヤブサの繁殖のために努力していることは、企業の活動として宣伝に利用しても良いと思われます。

・こうした工事中の配慮、などが効果を上げているかどうかを検証するためには工事中・供用後に行われる事後調査が大切で、準備書作成時など工事前に実施した程度の調査が必要と思われます。

1226 頁 採餌場への影響

このハヤブサの狩り場所は、主に北側の海上などで行われている傾向があり、事業地の環境改変がすぐに影響を持つとはいえませんが、植樹などで樹林創出には時間がかかることを述べておきます。

・・・工事に伴い一時的に樹林・草地が失われるが、原状復帰することから・・・とありますが、植樹後樹林になるためには10年とかいった、時間がかかります。一部とはいえ動物の採餌場を10年取り上げることとなります。もっと広い採餌場所は他にあるのだから、として動物はあっちへ行けばよい、との思想は受け入れにくいものです。樹林になるには時間がかかること、ミミズ類や昆虫類などが増えて、鳥の採餌場所になるにはさらに時間が必要で、そこに来る鳥をとるハヤブサのためには一層の時間が必要になります。

841 頁 (C) 7.評価

供用後動物の生息環境は回復する、としています。緑地の創出について、樹林が樹林としての役割を果たせるようになるには、時間がかかることを十分に認識する必要があります。

ここで繁殖する現在の個体の保全と、供用後にここへ来る将来のハヤブサの保全に必要と思われることを述べさせていただきました。

以上